2023年9月24日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

散らされて

［創世記11章1節～9節］

世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。東の方から移動してきた人々は、シンアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。彼らは、「れんがを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくいの代わりにアスファルトを用いた。彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った。主は降って来て、人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て、言われた。「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。

[1]　祝福の方向とは裏腹に

「バベルの塔」の物語は、有名な物語ですね。ここには言語・言葉が分かれていったその起源が示されていることになり、あぁ、世界中に様々な言葉が存在しているのは神様の審きがあったからなのだな、これがなければ外国語を学ぶ苦労がなくて済んだのに…と思ったことがある人は、きっと私だけではないでしょう。しかし、どうなのでしょう。「言葉」が一つであれば私たちは幸せなのでしょうか？意外とそうではないということも今日の箇所で分かるように思います。

この「塔」のある「町」ですね、それを作ろうとした人々―まあ、私たちの先祖だと言っても良いのでしょうが―は、「全地に散らされることのないように」したいと思ったようです（11:4）。けれども、これは神様の人間の祝福のご計画とは違うものですよね。創世記の第1章で、神様が人を創造された時、このように聖書は記しています。27-28節。「神はご自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。『産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ…』。さらにあのノアの箱舟の大洪水の後で、神様はこのように仰いました。9章1節。「神はノアと彼の息子たちを祝福して言われた。『産めよ、増えよ、地に満ちよ』。」　人間は、祝福されて、この地球上に増え広がって行くのです。ところが、このシンアルの地（バビロンのことではないかと言われます）にやってきた人間たちは、横に広がるという方向ではなく、高い塔があるそういう町をここに築いて生きていこうとしたのですね。4節に動機が書かれています。―「彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った」とあります。この「有名になろう」というのは、よく知られるというよりも「名を上げる」「自己礼賛」という意味があるようです。「天まで届く」という表現も、神は不要、私たちが天におられる神に代わるのだ、という思いが見て取れると思います。

この「バベルの塔」にはモデルがあったと言われます。紀元前三千年ほどのメソポタミアの“ジッグラト”と呼ばれる巨大な塔です。高さが約90mにも達したと言われています。高さ90メートルは現代では30階建の高層ビルです。幅もかなりあった。技術や素材の進化がそれを可能にさせたという事もありますが、それは、そこに偶像の礼拝所を設けながらも巨大な権力の誇示の建造物であり、そこで人がコマのように使われ、有無を言わせず働かされていたと思います。そういう絵画があるのですね。19世紀のフランスの画家でギュスターヴ・ドレという人の版画絵で「天に届くバベルの塔」という作品です。バベルの塔は雲の上に伸びていて、そして、塔の下には、重労働に苦しむ人々、また、労働者とは思えない人々も頭を抱える苦悩に満ちた人々が大きく描かれています。

[2] 「同じ言葉」という全体主義とそこからの解放

聖書を見ると、この時の人間は「同じ言葉を使って、同じように話していた」（11:1）と記されています。これは一見良いことのように思えます。しかし良く考えると「同じ言葉を使って、同じように話していた」というのは、恐くないですか？同一化。人間というのは、だれ一人「同じ」ではないのです。これは本当に大事な事だと思います。そして、神様は、個人個人を、その人格を愛される方です。「あなたは私の目には価高く、貴い」（イザヤ43:4）と言って下さる方です。私たち一人ひとり、それぞれの人格をです。しかし、まことの神様の思いを無視した社会、神様に聞こうとしない世界は、一部の人間の権力や政治が絶対化されて行きます。そこに悲劇が生まれますね。―「同じ言葉で同じように話す」。それは、全体主義に繋がるのではないでしょうか？それは恐しいことで、その全体主義の中、浮いてしまう者は排除される、そういう歴史というものがありました。「戦争」とはそうですよね。「戦争」が起こると、人間はまるでマインドコントロールにかかったように、一つの方向にひた走り、それに反対する者は「非」国民になります。

『聖書教育』誌の9月号で、今月の聖書の学びを執筆されていた、福岡西部教会牧師の麦野達一先生が、この4節の「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう」という言葉は、「自分たちの町と自分たちの塔を築こう」という意味だと書かれていました。「自分たちの」なんです。自分たちしか見えていないし、見たくない。これは現代的に言えば、多様性を認めない世界です。権力者の意向に沿わない者はもう仲間ではないとされる。下手をすれば、そのような者は密告されてしまう恐れに満ちた社会です。

そこで神様は、この町をご覧になってこう言われました。6節以下です。「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」―これは神様の審きでもありますが、憐み、救いでもあるのではないでしょうか。このまま進んだら人間は自滅してしまったでしょう。神様は“降って”行かれて、人間たちの言葉を乱されました。人間たちを滅ぼされた訳ではありません。「全体主義」のまま行かないようにストップをかけたのです。あなた方は、自らを高めるのではなく、正しい言葉・言語を受け取る必要がある。そのためにあなた方をここから散らすと、神様は人間に新しい歴史を与えたのではないでしょうか。やはり麦野先生はこのように書かれていて、私はなるほど本当にそうだと思ったのですが、***「自分たちの意思に反して言葉が混乱することや散らされることは自己中心の観点からすれば苦痛ですが、神の側から見るとそれは神のみ心の始まりと広がりであり、むしろ祝福です。「自分たち」の町の建設に失敗した人々が「神に」遣わされて、散らされて行くのです」***と。

神様は、人間を多くの民族に分け、それこそ「地に満ちよ」と多数の言語を用いるようにされた訳です。言葉とか民族の違い、そしてむしろそれがあることは、お互い同士を守り尊重するということに繋がっていったのではないでしょうか。

[3] 主イエスは神様の言葉そのもの

私たち信仰者も「一つになる」ことを良く奨励されます。でもそれは「全体主義」とは違う筈です。私たちが日曜日毎に教会に集まり、礼拝をするということも何のためなのでしょうか？私はこのバベルの塔の話を通して思いました。私たちは“集まること”が目的ではないのだなと。「見よ、兄弟が共に座っている。何という恵み、何という喜び」（詩編133:1）とありますけれども、私たちはここで何のために座っているのか。ここにとどまるためではなく、自分の所に帰って行くためです。散らされて行くためです。確かに私たちと他者との関係は難しいことも多く、なかなか辛い経験もさせられるという経験もすると思いますし、逆に、相手からすると私自身がストレスになっているということもあるでしょう。言葉のコミュニケーションというのは本当に難しいですよね。神様はそのことをよくご存じだと思います。そして、私たちが本当に聞くべき「言葉」があると思います。それは、「イエス様」という言葉です。イエス様は、バベルの塔より遥かに高い天から降りて来てくれた神様の言葉そのものです。あのパウロは言いましたよね。「十字架の言葉は滅んでいく者にとっては愚かなものですが、救われる者には神の力です」（一コリント1:18）と。パウロも自分の限界を知っていたからこう言ったのではないでしょうか。十字架こそが神様の力です。私もあの人もこの人も、あの十字架によって赦されているんだ、神様はこんな罪人を愛して下さっているんだ、それを感謝して、今の私の生活の場所に“散らされて”行く。それが、私たちが礼拝に集まる一番大きな目的なのではないか、そんなことを思わされています。私たち一人一人の中に注がれている聖霊が、また、他者との関わりの中にも働いて下さいます。そのためにも私たちは、主のお声をいつも新しく聴いて参りたいと思います。お祈り致します。

　神様、今月もこの時までお守り下さり、ありがとうございます。私たちはどこにあってもつい「力関係」などと言って、力の支配から抜け出すことが出来ず、不自由な生き方に陥ってしまう者です。そしてお互いが争ってしまう愚かな者であります。主よ、どうぞ、あなたの十字架のもとに額づかせて下さい。私たちは、互いにあなたの愛を頂き、違いを受け入れ合いながら生きて行きたいと思います。私たちの力ではそれは出来ません。どうぞあなたの御言葉を聞かせて下さい。そして聖霊のお働きにお委ねする信仰をお与え下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります。